

構造調整とアフリカ農業

高根 務

国際ワークショップの位置づけ

アジア経済研究所では、平成5・6年度に「構造調整とアフリカ農業」をテーマにした研究会を組織し、アフリカ諸国で行なわれている構造調整政策と農業との関連について多面的な分析を行っている。この研究会では、事例研究としてタンザニア、マラウイ、ザンビア、ガーナ、ナイジェリア、コートジボワールをとりあげ、平成7年3月に刊行される最終報告に向けて、各国の経験の検討が現在進められつつある。

この研究会活動の一環として、国際ワークショップ「構造調整とアフリカ農業」が、平成6年3月に開催された。このワークショップには、研究所内外のアフリカ研究者に加え、ガーナとタンザニアから招聘された2名の研究者が参加し、アフリカ諸国の構造調整と農業の問題について活発な議論が展開された。

ワークショップにはガーナ、タンザニア、コートジボワールの事例をそれぞれ取り上げた3編の論文が提出され、その発表をもとに議論が進められた。以下ではその発表の要旨と議論の内容を紹介する。なお、発表者と提出された論文は以下のとおりである。

原口武彦

(アジア経済研究所、現新潟国際情報大学教授)

「コートジボワールの構造調整と農業」

ヴィクター K・ニャンテン

(ガーナ大学統計社会経済研究所副所長)

「ガーナの構造調整と農業」

カスバート・K・オマリ

(ダルエスサラーム大学社会科学教授)

「構造調整プログラムの農村開発と農業開発への影響：タンザニアの経験」

議論の内容

コートジボワールの事例を分析した原口氏は、この国の農業部門における国家セクター（各種の農業関連公社など）の役割に注目し、構造調整下の改革でこれらがどのような影響を受けたかを論じた。そして構造調整に伴う国営部門の縮小や民営化の波の中で、個々の農民が国際競争に直接さらされつつある現状が報告された。

この報告に続く会場での議論では、CFAフランの切り下げと旧宗主国であるフランスの影響力の



当日の発表風景。左から2人目がタンザニアのオマリ氏、その右がガーナのニャンテン氏

問題、債務問題に関する債権国側の責任、自国の農業を保護しながら途上国に自由化を迫る先進国の問題など、より大きな視点からの問題提起が行なわれた。

ガーナの事例を分析したニャンテン氏は、構造調整下のガーナ農業の実態を、豊富な統計資料を駆使してきわめて包括的に分析した。そのうえでニャンテン氏は、構造調整導入後の短期間は農業部門の成長は認められたものの、中長期的にその生産性は向上しておらず、また農業生産のインセンティブも失われつつある、と結論した。

この報告に対して会場からは、構造調整の実施に付随する効率性と平等性の問題、構造調整の影響を評価する際の方法の問題、さらにはガーナの実績を評価する立場からの、ニャンテン氏の報告に対する反論など、活発な議論が展開された。

続いてタンザニアの事例を論じたオマリ氏は、構造調整の農業部門への影響を社会学の視点から分析した。まずコーヒー生産への影響について、構造調整下での投入財価格の高騰や、利益のより大きい他の作物への転換を農民が行なっている現状などの問題点が指摘された。また構造調整下の諸政策が女性農民に不利に働いているとの分析も提示された。

これに対してタンザニア農業を専門とする複数の参加者から、構造調整に伴う地域間格差や村落

内格差の問題、政府機関の能力と効率性の問題、農産物の国際市場とタンザニア農業の連関など、多様な問題提起と議論が行なわれた。

おわりに

このワークショップは、アフリカ諸国の構造調整と農業に関して、特定の評価や政策提言を行なうことを目的としたものではない。むしろ提出された各国の事例研究をもとに、多様な角度からの問題提起を行ない、今後の研究の足がかりにしようとするものであった。その意味では十分な成果があったと考えられる。

また、問題の当事者であるアフリカ側から、招聘者およびアジア経済研究所客員研究員を含めて多数の参加が得られ、日本の研究者との意見交換が行なわれた点も重要であった。援助供与者側の一方的な評価に終わらないための、アフリカ側との対話の一機会としてこのワークショップの成果が利用されることを望みたい。

〔付記〕 本ワークショップの成果は、*Structural Adjustment and African Agriculture* (Africa Research Series No.6) としてアジア経済研究所より本年8月に刊行されている。

(たかね・つとむ/アフリカ総合研究プロジェクト・チーム)